

震災復興の思いを込めた福島の集成材

2万人を超える死者・行方不明者を出した東日本大震災。大阪・関西万博のシンボルである外周約2kmの巨大木造建築「大屋根（リング）」向け集成材の一部製造を福島県浪江町の企業が受注した。木材製造のウッドコアである。

「万博で私たち被災者のふるさとへの思いを形にしたい」。ウッドコア取締役で朝田木材産業社長の朝田英洋氏は力を込める。ウッドコアは、木材製造の朝田木材産業（同町）と藤寿産業（福島県郡山市）が共同出資して2018年に設立。主に国産の集成材を独自の積層接着技術で生産する。

大屋根は、完成すれば世界最大級の木造建築となる。リング状の形で、円の内側（高さ12m）から外側（同20m）に向かってせり上がる構



ウッドコアの工場で製造されている大阪・関西万博の大屋根の梁材

造だ。京都・清水寺の舞台をイメージさせ、柱と梁（はり）を交差させるデザインは、日本伝統のもののづくりの力をアピールする。建設は大林組などが担当し、総工費は約350億円だ。

大屋根に使用する木材量は約2万 m^3 に及ぶ。ウッドコアの集成材は、大屋根を支える柱や梁に使われる。大林組が使う梁材はすべて福島県産のスギで使用量は約3500 m^3 という。3

月、リングが設置される万博会場のある大阪の人工島、夢洲に向けて最後の出荷を終えた。

耐久性・耐熱性に優れた集成材は「ミルフィュー」のように複数の木材を接着剤で結合してつくるが、それゆえ高い精度が求められる。ウッドコアの独自技術が高く評価された。

東日本大震災から13年が経過したが、浪江町は復興に向けて本格的に動き出したばかりだ。

そんな中、万博を通じた浪江町の取り組みは、将来の地域発展に向けた希望の一つだ。朝田社長は「脱炭素や環境への意識の高まりを背景に木造建築を普及させ、会社を成長させたい」と語る。社会課題の解決をテーマにする万博は、その起爆剤になると期待する。